るべし

第五十一章　子女ゝ母、親の胎内にて啼くと能ふ乎

子女の未だ子宮内に在る間に泣啼ぶと聽れさる例と確證に記錄に載りこの例さるや規則外の甚だしきものあり通常の情態にてゝ大氣の現在あきゞ故に胎内に於て呼吸と爲し或ゝ啼ぶと能き難きものとそ獨りこの事の起るゝ胞衣の破れて胎兒の口ゞ子宮の頸り又ゝその近傍に來りさる時にあるのみそれ勢力ゝ既に始まりて兒子ゞ未だ子宮よりその頭と出さゝる以前に大氣ゞ子宮内に突入ると以て將に産れ出んとそる前に啼くとと聽くゝ稀あるとにあらさ

第五十二章　胎兒の男女と如るの説

胎内に在る子女の性(男女)に從て妊娠女の太さと形ちに差異あるゝゝ乳婢同士の普通に云ふとあれとも實に然るや否と疑ひ惟みるとゝ或ゝ亦一方の性ゝ他の性よりゝその運動くとに於て一層働き强しと云へる説も信とそるに足らさ去りあゞら婦人已れゞ固有の月の大約何時比に孕胎さる手と告ると能きるあらば胎兒の男女と知るゝ充分に能くべき事あり若夫れ孕胎ゞ月經の直後に起りしあらばその兒子ゝ女子にして若月經の直前に孕みさればそれてそ男兒あり偖又婦人分娩の期と算誤りて彼れが思ひ設けさる分娩の期と越ゆる時ゝその兒ゝ通例男子に産れ出づるあらん熟達の醫者ゝ妊娠の終際の月にあれゞ或る場合に於て性(男女)の疑問と決定そると得べし即ち胎兒の心臟の脈搏ゝ男性よりゝ女性の方と一層頻ありとそ嘗で經驗されたる二十八人の女胎兒の脈擊の平均の數ゝ一分時毎に百四十四あるとと發見されたり此の内最も少あき脈擊の數ゝ百三十八あり又男胎兒の二十二人の平均の脈擊ゝ其數百二十にして此の内最も少さも

のゝ百十二擊あり夫れ故に子宮内に在る兒子の心臟の脈擊が數へらるゝ時に(妊娠の晩き月の中にゝ慣手の醫者の耳にて之れを數ふるゝ容易きことあり)一分時間に百三十以上あれバその兒ゝ女子あり若し又其數百三十以下あればこの兒子は男あり是れに由て胎兒が何か病氣の爲めにその心臟の働きと障げられさる時にあらざれば未ゞ産れ出でざる子女の性と屹度的密に預言ふことを得べし

第五十三條　胎内に雙兒の在るや否やを知るの說

非常に腹の太きと及らびにその太さの增加ゝると通常より速かあるが如き或ゝ確としさる徵候ゝ雙子にてゝれあき乎と疑念を起さゝるに至る時としてゝ又直縱の割線を以て腹部を判然と二部分に分別ることあり或ひゝ兒子の運動が各脇に同時に感せらるゝことゝ之れあり且又雙子の妊娠に於ては朝病の一層苦しきこと多し及らびに妊娠中に起る他の諸〳〵の不快寬あることゝ增し加ふること多し然れども右等の徵候及らびに症狀ゝ某例に於てゝ之れありと雖も必ずしも雙子の確證と爲し難し如何とあれバこれ等の徵候ゝ單子の妊娠にても見らるゝこと之れあれバあり爰に醫學者ゝ一つ特別て誤あき徵候と知る此の徵候によりて婦人の雙子と懷胎て在るやゝやと極定むることゝ得偖之れと極むるの方法ゝ余が前章に說きさる如く醫者として胎兒の性と見極めしむる所のものと同事にして即ち聽くことの術(これと術學上にてゝ聽胸法と稱くゝ)ゝ復雙子と知るにも醫學者の助けとある若夫れ腹の兩側に二つの胎兒的の心臟の脈擊が聽るゝときにゝ妊娠の性質(雙子あるこゝ)ゝ明瞭あり

第五十四章　懷胎の時間

抑懷胎の通常の時間ゝ如何あるものの乎殆んど各〳〵の婦人此の問に答る

に九月ありと云ふを以て自ら誤まらぬと思考へり去るにこの答へハ術學上の精密にうけれべいまゞ充分あらざると云ふことを聞いて彼れ驚くことあるべし而してこの答へハ餘り不極として且へ誤まれるあり夫れ曆の月と太陰の月とに大いなる差ひあり各大陰月ハ二十八日あるがゆゑに太陰の九个月の時限ハ二百五十二日ありとせ之れに反りて曆の九ヶ月ハ二月の月を算入れて二百九十三日あり今懷胎の平均時間ハ二百八十日にして之れを詳に言へべ四十周日即ち大陰の十个月あり○最も手廣く取られさる經驗に因れべ妊娠の眞の時間ハ概則四十周間即ち一百八十日あるとを以てこの時間ハ妊娠の差違あき時期ありと決定そるいその當を失ふべき哉この問題さるや如何にも屢親族の名譽人々の權利及び時として一國の實益ハ此問題の答辨之上に關るとあるゞ故に從來世々に於て醫學者理學者

及び制法者の充分に注意て之れを研究むるとを要むるものとそ一方にハ造化の法律ハ確乎不變ものにして妊娠の時期ハ自ら定極ありて決して早遲の變差あるとあしと信ぜる人ありし今一方にハ分娩の期限あるものハ或ハ知れさる或ハ未ゞ詳知せられざる種々の原因に由りて大いに遲速あらしめらるゝありと勢言る人ありぬ出りあゞら通常の妊娠時間とそる二百八十日即ち四十周日の外に延るとを證據立さる數多滿足ある證據あり且又この事ハ人體の他の功用に付て經驗されさるものに對しても背乖くとあし夫れ生活の法則に關はる推歩の中にその出現る時期にもせよ又ハ經續の時限にもせよ全く差違あきものハ一も之れあるとあし余ゞ既に指示さるゞ如く成女とある の期も遲速せらるゝとあるハ人々の知る所あり余ゞ後章にその都合と得て說んとそる所の婦人の生活力の一變そる時期も亦差違と免れ

ぜ而して子女の萠歯る時期も時として奇妙に遲速そるとゝれある
ゝ母、さる者の常に經驗せる事件あり此の故に人體の功用に或る變遷
のあるとゝ種々他の自然の推歩に於ても屢經驗るゝ所にして全く身
體の健康に從るものあるに胡爲に妊娠の推歩ゝ常則と外れてその時
限の經續に差違ゝ生ぜるとあらん哉且又人間以下の動物にて經驗
し見るに妊娠時間の長短に拘ゝりてゝ造化も平等の法律と以て制せ
ざるとの最も納得そべき證據と與ふ去れゞ牝牛の懷胎時間ゝ通常婦
人と全じかれ共この常則の期限と越もると六周日にして分娩そると
の例しゝ少しも珍しきとにあらぜ○余が今說論そる條件の穿鑿に時
としてゝ大いある實益の關ゝるとあるがもゑに其例として茲に千八
百二十五年に英國政府の上院にて裁判せしガーヅナー家華族系續の
評判の訴訟と諳誦せんアーレン、ソッジ、ガーヅナー氏と云へる人政府の

記錄に已れが姓名と華族として記るされたしと願出りこの人ゝ華族
ガーヅナー氏の第二の妻女より產れたる子息あり然るに爰にまさへ
ソリー、フェントン、アイヤヂスと云へる人華族ガーヅナー氏の最初の妻
女にてその後離緣せられさる妻女より產をされ共同氏の息子ありと
云へる道理と搆訟にして此華族の系續の相續人あるとと要求せり偖
この終りの者(ヘンリー、フェントン、アイヤジス)ゝ妊夫の子さるとと確定
せんが爲めに醫學上及らびに道德上の證據と持出されさり此の搆訟
せる妊夫の子の母親とそるガーヅナー氏の夫人ゝ千八百二年一月の
三十日に其夫に別れり之ゝ夫がガーヅナー氏が西印度に行くと以てか
り而して同氏ゝ明年し七月十一日までゝ復びその妻女と見るとあり
りし彼の正統不正統に付て疑はるゝ兒子ゝ同年の十二月八日に產り
是れに由て該の兒子ゝ情交の後三百十一日(一月三十日より十二月八

日迄)にて産れさる乎否らざれば百五十日(七月十一日より十二月八日迄)にして産れさると以て愈華族がーッナー氏の子息さるべき乎否らざる乎と決定そべき繕飾あき醫學上の吟味と持ち出せり然るに該兒い産れ出さる時に能く成長してありしが故に未熟の出産ありと牽強と爲そべき由あきと以てこの兒の孕胎い是非とも一月二十日より日記へざると得き是れに由て醫學上の疑問い左の箇條に縮まれり即ち

[捫言さる長延の懷胎(三百十一日)い從來の經驗と符合せるや否ざる乎]

依て大貌利顛中屈指の現術産科醫の十六人此の論点に付て吟味せられたり此十六人の中十一人い自然の妊娠も捫言さる此奸夫兒子の出産と庇ひもそべき時期まで長延くともあるべしと云ふと同意せり然れどもガーッナーの夫人がアイヤザス氏と云へる人との姦通と證明にせし所の道德上の證據のみと以て結局上院い該の華族の稱號い

ガーッナー氏が第二の妻妊の産さる子息に傳ぞんばわらぞと判決せり○爰に妊娠時間の長延ると二百八十日即ち四十周日と越るとあると云ふと雖も拙難爲し難き程に確定にせる能く經驗されさる事實と記錄に載り巴里斯の博識ある醫學博士デソミユーー氏いこの例の事情と報告せり之れい同府の産科病院に於て同氏が目擊し所ありの某一人の婦人既に三人の子女あり)狂癲にありしと以て彼れと診察せる醫師婦人が新に妊娠それば情心の力と再定そともあるべしと思考り依て彼れが夫いその妻女と見訪ふ回毎に此の病院の簿帳にそれと記さしむると承諾せり偖此の見訪い三月旬に僅一回ありし妊娠の徵證が自然現いるゝや速や見訪と絶てりこの婦人い孕胎後二百九十日の間妊娠して居れり○米國費府の有名き故の大學教師チャールスゲー、メイグス氏い妊娠の時間四百二十日即ち六十周日に迄るまで長

延さる一例と全く信用して出板せり醫學博士アトリー氏ハ各殆んど三百五十六日に及びさる二つの例と報告をエッヂンボルグの大學教師シンプソン氏ハ彼れ自分に診察と爲しさりとて妊娠時間の三百二十六日、三百三十二日、三百二十四日及らびに三百十九日に達しさる各の例と記載りダブリンの一年四回醫學雜誌中に醫學博士ジョーイント氏ハ長延妊娠の一例と掲げり此の例ハ最も短き時間ガ三百十七日即ち平常の妊娠時間よりハ大約六周間あゞきと屹度證據立り醫學博士エルツーサー氏ハ妊娠の百六十の例中に三百日乃至三百十八日の時限に延びさる十一の例と見出せり○余流産の論題に付て論をる時に或る婦人ハ妊娠とおりて未ざ四十周日と經ざる遙り以前に孕生る子女と産むと之れあるおりと疑の影ざにおき如く確證と以て熟練正實おる醫者の記載さる數例と著せり輓近に蘇國エッヂンボルグの教會

て於てフォルガス、ジャーダイン法師の妻女が産みさる兒ハ婚姻後二十五周日以内に活て産れさるおれども正統の兒おりと判決せり○歐羅巴の最も開化さる國の一(佛國)ハ懷胎時間の極度に關はりさる事實の見込にて彼の那烈翁律の中に夫の旅行後又ハ死亡後三百日以内に産れさる子女或ハ婚姻後百八十日と經て産れさる子女ハ正統おりと認めぎんべあらぎと云ふとと制定せり該の律ハ尚又三百日以上にして産れたる子女ハ必ぎしも不正統の子女として公布し難くして却てその正統おるや否ざると爭はるゝとと之りありと云ふとと掲ぐるの條件に付て蘇國の憲法ハ佛國の憲法に甚ざ類似し

第五十五章　長延おる妊娠の原因

或る子女ハ九月にてハ未ざ子宮として己れと産出さしむるに要用おる成長と得ざると以て十月或ハ十一个月にして産るゝおりと或る人

ん主張せり夫れ平常の時期より永しく胎内に在りさる子女ん必ず巨大くあくんべあらずと云ふとん世俗の説あり「ラベレース」氏ん「ガーガンチューア」と題せる彼れの著せる小説本の中に此の標題と同じ名の著るしき巨人んその母親「ガーガメル」と稱れさる人の胎内に十一个月在りさりとして顯んせると以て彼の世俗の説と摸寫せり此兒子ん產れ出さる時に十人の乳母より哺乳し程に強壯ありし彼れ數百年の間生らへて終に己れに等しき不思儀ある男兒「パンタグルーエル」と生めり去りあがら如此の論理ん眞白に引受け難し如何とあれべ九月以上胎内に之れありさる數多の子女と纔周日未熟にして產れたる或る子女に比ぶるに一際充分に成長せると見ざれべあり而して余が後章に顯んさんとそるとく產子の大小ん分娩の難易に少しも關係そるとあり夫れ長延の妊娠ん道德上と性理上の感勢にて子宮の働らきに不足

と生ぜるに原づけり常則にてん規則正しき生涯と爲し而してその身の性理上の法律(この法律と指示そこと余が目的あり)と守る婦人ん通常造化が記畫れる時期にて分娩と爲そべし詳言へば孕胎さる時よりして二百八十日即ち四十周日と經て分娩と爲そべきあり偖この事さるや余として左の問題の思考と起さしむ

第五十六章　如何して勞力の時期と算ふべき乎

從來この目的と以て數多の規則と設けられさりと雖ども余ん最も滿足にして最も容易く施用らるゝ唯一つの規則と與ふべし即ち余が與へんとそる規則んヘイデルボルグの有名き大學教師「チージレー」氏が告示ものにて今日一般に醫學の勸め用ふる所のものあり この法さるや起算の点ん最後の月經下り止みさる日より算て往き十二个月即ち翌年の同じ月日の中より三个月と除去り而して七日と加へて得さ

る日々即ち勞力の始まる期日に當る而して通常の如く孕胎むとが最後の月經の直後に起りしからず正しくこの日ゝ孕胎せし時より二百八十日にあるとと發見そべし例ば最後の月經の止とさるゝ一月十四日にありと假定むべしこの日より往き十二个月即ち翌年の一月十四日の中より三月と除き去れゞ同玄年の十月十四日に當る今之れに七日と加ふれば十月の二十一日(一月十四日より二百八十日)と待ち設けさる分娩の時とし得るこの計算法方ゝ信憑と置くべきものにして而して孕胎とが月經の直前か或ゝ月經中に起りさる規則外の場合に於るも唯僅かの日數と誤まるのみ

第五十七章　妊娠中の攝生法

孕胎の始より分娩時に迄る時間身の健康と適當に保護そべき論題ゝ熟考と費やそに足れり抑妊娠の情態ゝ素より疾病の情態にてれあらとと雖も萬一これよりして母子の身の上に或る病ひと提起ととあらんと恐るゝ故に一種特別なる注意と要む如何となれゞ新體(兒子)の榮枯ゝ今此の際にあると云ふとと心に記めそんゞあるべうらそ婦人玆に至れば最早獨立の身にあらそ彼れ既に母親さるの義務に入れり而して孕胎さる以上ゝ未ゞ分娩と爲さゞるとゝ雖も既に母親とあれりその子女ゝ未ゞ產れ出そと雖もその胎内に享生へると以て胎兒の生命ゝ母親の生命の一部分なり而して何にても母親の身の上に不注意あるとあれば之れと失ふゞ程に脆弱きものとそ夫れ胎兒の生命の危險きとゝ決して想像にあらそそなはち流產及らびに死產の數多あると以て之れと証そべし○母さる者ゝ誰しも健全にして體格好く而して怜悧なる子女と有んとと願はざるゝなし然るに子女の幸福なる成長と確りにそる樣にその身の行狀と守る婦人ゝ幾僅少なる哉矮軀

不具及らびに腦力の乏き子女が日々此の世界に紹介さるゝその故如何と尋ぬるに妊娠よりして體の情態が平常と異變れると以て日常の生活と規則正しく爲そゝめに平常よりも一層要用なる特別の方便と認識るとなきと或いは有罪らざれと怠慢るがもゝあり是以て余い懲罰と受くるとなしにも破戒り難き法律と掲げ而してこの大切なる時限中の食物、運動衣服その他一般母子と益そるに第一とそる行作と指示さんとそ

第一　食物

妊娠中に用ふる食物い滋養物と澤山に食せぞんばあらぞと雖ども月の早き間いその分量い平常より多かるべうらぞ飲食そると度に過るとい最も注意して用捨せぞんべあらぞ食事い平常に比ぶれべその挾間と短縮かめて淡薄にして滋養あるものと食そべし脂濃き物硬粗なる野菜物、非常に鹹き食物及らびに非常に甘味き物い屢その例しあるものにして若し口腹に適はざれべ之れと避け扣へぞんべあらぞ幼羊牛鳥の如き若き禽獸の肉及らびに新鮮なる魚肉い健全にして大概冒の腑と和合そるものなり能く熟しさる果實も亦益あるなり食物い成丈け毎日その品と易ふると良とそ或る婦人い夜中或い早朝に食と貪るとあり之れい乾蒸餅、少しの牛乳ゥ又い伽俳の一碗にて凌ぐべし朝起る少しく前に之れと用ふれべ朝病の苦しきときと雖も大概腹に治まるべし而して至極有難く覺ゆべし如何なる食物にても又藥劑にても腹中と秘結し或い攪亂そものい禁せぞんべあらぞ嗜味い規則として無難なる先導者にして口に適ふものい適宜に嗜むい害なかるべし然ども不適當にして有害なる食品と至極恣に貪欲るとい素より杭鋤ばぞんべあらぞしかし子供の時より當適に育成られさる婦人い斯

る貪りと經驗と稀なり茲に奇妙なる事實の時として妊娠中消化機關が大いに變化して平常に比べて最も消化し難き物が少しも妨げなく食せらるゝのみならず却て益となし然るに元來最も健全なる食物が却て害となり毒となるとあり○妊娠の期期の進むに從ひ特に第六月目以後の食物の分量を增し而して一層實質物を食べし此時には食事の毎回に澤山に食べるよりも寧一日の食事の度數を增せと良しとせ

第二　衣服

妊娠中の衣服の緩快なるものを用ひ何部分も固く絞るやうなるとあるべからずチンサンと云へる語の妊娠女を指して云ふ辭なるが根元の辭義の帶紐なしの意味なり詳言へば緩解くの意を有つ羅馬人の母の妊娠するや速や彼等が帶紐を取り除らせらるゝが掟なりしライカルガス(スパーター國の有名き制法者)の制定るスパーター律の中に妊娠女の幅の廣き衣服を着ぜんばあらずと云へる个條を掲げり是即ち造化が婦人の身を暫時貯蓄所と爲して置きさる所の貴重なる貨物(兒子)の自由に成長するを障碍げしめざるが爲なり腰窄具の適宜き工合にして妊娠の初の五六ケ月の中の之を用ふるも妨げなしとそれども この時を過せばそれを全く取り除く乎否らざれば甚だ緩らに着ざるべからず紐にて固く締付けるより又の鯨骨の編紐を用ひるりして妊娠を蔽秘そとの手術の孰れも咎めても尙咎め過し難し斯る僞りの婀娜なるをよりして母親の大いなる苦痛に罹り子女は命を失ふ程の危難に暴さる腰窄具の形ちの腹部の形ちの變る通りに撲取ぜんばあるべからずそれを以て乳頭を歷窄け或の膨脹んとする乳房を刺劇爲さぬ樣に能く注意せんばあるべからず○衣服の分量の季節に從て調度せざると得ずと雖も妊娠中の天氣の變化に大いに犯され易きがもろ

に減少そよりい寧そ増そ方と良しとそ月が進みたる時にい布羅涅留の下股引と着ると特に緊要あり如何とあれば衣服の緩やゝあるが爲めに體の庇纏いれざる部分に寒氣の障り易ければあり此の注意と怠るよりして時としてい子宮僂麻質斯と稱へる苦痛しき病と引き起そとあり○足の膝節或い踵節の近隣と壓窄めると避けぜんべあるべからぜ妊娠の終際の月にい特に之れと用捨そべしこの壓窄い靜脈の膨脹と結節とと生じ而して足部の膨脹と腫物とと生ぜ易し之れより して數多の婦人妊娠中蹉とあり又時としてい生涯蹉とあると是れに由てガータース(脚部に纏ふ靴下の紐)い固く締るとあかれ而してゲータース(踵部と庇ふ靴の部分)い踵と確かりと押へるやうにい爲さざると得ぜと雖ども餘りに固く爲さいると良しとそ

郊野に出て適宜に運動と爲そとい妊娠中孰れの時と問ぜ適當かるものにして健康に益あるものありと雖も疲勞と引起そが程にい決して運動と强くし或い長くそると あり就中逍遙い諸運動の中にて最も善良あるものとそ細工惡しき馬車の中或い凸凹ある道路と乘り行くと或い馬に乘ると並らびに走馳ると舞踊そると及び重き物と揚げ運ぶと等い能く注意して避けぜんべあるべからぜ如何とあれば之れよりして脫腸劇しき出血及び流産と提起し易けれべあり殊更に早際の月にい非常に長き歩行及らびに舞踊そると恣まゝにそべらぜ妊娠中い又旅行と爲そあり れ萬一之れと爲そとも瀛車の旅行い斷然避けぜんべあるべからぜ瀛車の震ひ動くとい頭痛、胃腑の病、眩目と引起し而して未熟の産と起し易し總て此等の注意い特に最初の妊娠中に守らぜんべあるべからぜ○諸卿等余い運動並に新鮮ある空氣と咎む

るかりと誤解るとかれ運動及らびに新鮮かる空氣い母子の爲に最大緊要かるものかり然れども運動の分量い世人の通情と婦人自身の感覺の差圖と以て規則立ぞんばあらぞ若し夫れ婦人毎日唯短距離と逍遥くと以て快よしと覺もるからばそれにて充分せり却て極りさる所まで强て往くとや又い一晝夜の間に幾時と極めて押して逍遥くやうかるとと爲そべうらぞ疲勞と覺もるや速や歩行とと止むべし偖又逍遥い度數と少かくして長くそるよりい寧ろ屢して短りきと良とそ而して逍遥く間い珍らしく面白き記感と以て感想と滿足せしむる所の同伴と耳目に觸るゝものとに因りて成丈け愉快く心と樂しましめぞんべあらぞ怠惰に傾ぐ念い凌ぎ戰、りいぞんべあるべうらぞ優柔しく活發かる生活い母親及らびに胎兒の健康と保守る爲に最も良しと最も强壯かる婦人と雖も妊娠中い平常の仕業及らびに職業と適度に勉めると奸要かり心經質及らびに柔弱かる婦人い家事或い交際の義務と遊樂と平常のとく勉むるい危險と免れ難し○妊娠の終りに近づけば妻女い己れが氣力と蓄へ置くと肝要かり長く直立て居さり又い屈膝て長しく居るとかれ或いこの各の位置にて歌ひ嘯くとかれ

第四　沐浴

從來沐浴そるとと常とせざる婦人い妊娠中にこの習いしと始むるとかれ而して如何かる場合に於けるも終際の月の間にい餘程注意せぞんべあるべうらぞ偖沐浴そるに全く體と洗湯に漬そよりい大陽温水と以て海綿にて體と拭ひ潔むると良しとそ脚湯い妊娠中何日に限らぞ危險きものかり海潮に浴るとい時として流産と引起そとありと雖も海邊の空氣に逢ひ海水と汲み取て體と海綿にて拭ひ潔むるい良

きとなり驟雨浴(機關にて夕雨のごとく湯や水と注ぐものゝ無論知れて體に激し過るなり而して甚ぞ熱き湯ゝ體を弛緩め過すものとを心經質の或る婦人ゝ妊娠中間々夜間に微温湯の浴みゝ精心を鎮靜る感勢と有つ殊に之れゝ妊娠の最初の月と最後の月に最も功能あり然るに氷脉質及らびに體の弛緩む癖ある婦人にゝ沐浴ゝ常に害あり

第五　空氣の流通

余既に妊娠中戸外の空氣の益あるとに付て語れり亦家内の居間及らびに寐間の内にも大氣と新鮮に保つとに注意せんべあるべからぞ之れゝ不斷ぞ空氣と變換るとに因てばうり成功をると得べし座敷毎に人の居ざる時間ゝ夏なれば始終戸と窓と開放して置くべし而して冬なれば一日に數回新鮮なる空氣と以て部屋々々を洗ひ潔むる爲に窓や戸と充分開放そべし極く暑さと極く寒さとゝ等しく注意して

避けぞんばあるべからぞ家ゝ明るく大陽の光と拽くと肝要とを醫へば若き植物が暗き所にてゝ能く成長せざるが如く正しく卿等が子女も又その母親も大陽の光りなしにゝ繁榮へざるべし昔し人ゝ毎家にその屋上にソラーリヤム即ち大陽の空氣浴と造りしが程にこのことに能く注意へり偖彼等ゝ日々此所に出て薄き着衣にて大陽の直接の光線にその身體と露せり

第六　睡眠

妊娠中ゝ睡眠の分量と平常より多分に爲さぞんばあるべからぞ夫れ睡眠ゝ妊娠の爲に母親の攪亂しさる神經と鎮靜る感勢あり而して體中の諸功用ゝ睡眠に連れて靜穩にあるがもゑに胎兒の成長と助くるものとを或ゝ夜中遊樂と勉め或ゝ朝起に付て種々世俗口癖の格言と固守うと以て睡眠に委ぬさる時間と短縮むるとなれば妊娠女ゝ朝遲

くまで床中にあるとを好むものあり偖之れゝ妊娠中造化の他の進捗に等しく輕々しく見なすべからざる少なくとも二十四時間に八時間床中に睡休むゝその益あしとし難し妊娠中ゝ何時に限らず必らず睡ざ番抔爲すとなかれ○鳥羽の寢疊ゝ體と温熱とを以て不快寛なる上に危險きものなれべこれに臥ると用捨せざんばあるべからず如何となれば出血及らびに疲勞る程に發汗と引起さ原となればあり獸毛又ゝ海綿と容さる臥疊と用ふると良しとさ夜衾ゝ餘り重ゝるべからず綿衾よりゝ寧ろあら毛氈と用ふべし如何なれべ毛氈の方が一層輕きが上に體の蒸發氣と徹通せばあり臥疊と上夜衾ゝ晝間能く空氣に暴さざんべあるべからず寢局ゝ廣やかにして能空氣と流換しめ寢臺の周圍に帳幕と垂るゝとなかれ○且又晝間に時々休息さると緊要なり寢椅子に一二時間の轉睡ゝ妊娠中にゝ甚ざ氣力の養成となるべし偖此轉睡ゝ妊娠の早き月の間に於てゝ流産と防ぐの助けとなり又晩き月の中には子宮の巨くなるより自然と發る所の苦痛と緩和るの助けとなるべし妊娠の終に近づくに從ひて婦人横臥せんとする時に呼吸と塞ぐとあるゝ珍らしきことにあらず之れゝ座薄團又ゝ西洋枕と以て背と肩とを持支へるとに因りて避くるとを得べし或ゝ又寢椅子と用ふるも可なり偖この寢椅子ゝ能く造りて能く物にて覆ひなるときにゝ妊娠の最後の二三周日にゝ夜中至極難有く覺もると多し

第七　精心

閑靜なる精心ゝ妊娠女に於て第一緊要なるものとす氣鬱さる取起し苦勞と決して促し起さべからず余が再三告げるが如く妊娠と勞なゝ病情にあらずして健全の推歩なるが如く婦人各己れが妊娠と分娩ゝ我身の健全なる基なりと思考へざんばあるべからず抑難産ゝ甚ざ

稀なるものなれば之れを懼るゝの愚なるとゝ恰も瀛車の旅客が無難と謀て瀛車に乘るとを廢るに異ならぬ術學ゝ婦人に命くるに母親とあるこの悅びに逢ふと、氣力と落ちとなくして快樂み慕ふて之を蔑ひ待つとを以てを○母親の精心に何事に限らず畏懼るゝとの惡果ゝ

プリユーターチ氏能くこれを例解せりこの人の著せるパブリコラの傳記の中に「晉安述なる畏懼が羅馬の市中に溢れさるその時期に妊娠せる婦人ゝ盡く不滿足なる子女を產り而して分娩の時も未熟なりし」と云ふとを顯せり然るに余ゝ既に母親の痕迹に付て論ぜるとに於て胎兒の上に母親の心の感の勢力と及らびに母親の精心を衝動せるの原因を避くるとの緊要なるとを說さりし○嚴しき學問並びに熟心て長延しき手業などゝ害あるが故に用捨せんべあるべらず又數多の婦人他時に於てゝ氣持好くして少しも害にならざる香物が妊娠中

にゝこれが爲にその心經を損ひ害をるとあり此故に臭惡しきものゝ無論身邊に近づけざるのみならず戶又種々雜劇しき香物香水まさゝ花の類にても香强きものゝ用捨べし巨大なる匂花把ゝ眩目の感じと迫ることゝ屢これあり或ゝ時として暫時の氣絕を引起ることあり妊娠女の心經ゝ他人の苦痛及らびに忌惡ふべき物戰慄とべき物を見て自身及らびに子女の害になる感じを至極受け易きと云ふとゝ誰人に對しても銘肝じ過さしめ難し妊娠女ゝ何事によらず彼れが心を攪亂そものに近づらざる樣に保護けて而してその心を慰め勵ましべき樣に不斷深切に取扱はれぬんばあるべからず彼れ癇癪、精心の移變り易きと、氣欝ぎさる物案じ抔の情態を現はすとあらば之れを咄り罵しるとあくして道理を耐忍の調合を以て之れに抗戰ふべし又婦人の方にゝ總て害になる感勢を排斥けて而して諸不適當なる企望ゝ成丈け速か

に掃去りて己れが左右の者と和合せると勉強せんばあるべからざ
彼れ自身にハ損害と免るゝと雖も兒女ハ之れが爲に苦しむとあると
云ふとと心に記えざんばあるべからざ且又彼れハ自分の爲に自分の
身より尚貴重なる實益(子女)の守護人なるがゆゑに愼まざんばあるべ
からざ

第五十八章　妊娠中夫掃の接近

妻女妊娠中に平常ならば不快なるべき時に當る時日の間ハ夫婦の交
りと扣えざんばあるべからざこの間時に夫婦の交りハ母親に害あり
而して子女の生命と危なく爲そものとそ如何とあれば之れが爲に流
産と引起し易ければあり然るに平常月經の習慣の時期と避くれば妊
娠の全き時間中適度と注意とと以て行ふに胡爲ぞ情慾と果さべから
ざる道理ハ少しも之れあるとなし〻らし行狀のこの一般の路線に外
れて爰に止むとと得ざこの行なひと愼しまざんばあるべからざる一
事あり即ち最初の妊娠に流産したるときハ第二の孕胎にても復び前
のとく流産の起らんとと豫防ぐが爲に豫防法ハ盡く用ひざんばあら
ざ(此事さるや余が前章に於て論じさる道理に由てあり)故に如此に格
外の事情に逢ふ時ハ妊娠の初めの六月ハ夫婦離々に寢ざんばあらざ
この時限と經過せば平常の交際に復へるも妨げあるとなし偖流産と
爲せし時にハこの凶變より一个月以内にハ夫婦の接近と許さべから
ざこの差圖と遵守るハ至極緊要あるとにしてこの差圖と怠り守らざ
るとハ容易に治療し難き劇しき子宮病の原因あると多し

第五十九章　健康上に妊娠の效驗

余既に妊娠ハ病氣の情態にあらざと評下そる場合と得さり夫れ妊娠
ハ健全なるの證據さるのみあらざ尚又婦人妊娠の間限ハ之れが爲め

に生理上の強壯を得るものとを規則として婦人妊娠中は何時よりも一層健康を覺ゆるものにしてこの時には傳染病及らびに其他の病に罹ると少く彼れが一生涯の中にて何時よりも此時に死をること少し而して彼れが總體質も亦妊娠中に良き感化を受くるがとし如何とかれば妻女と母親は童身を守る婦人に比ぶれば享生へること永ければ夫れ婦人の心配せる生殖の舞臺に登りする間は病氣の苦痛と危難に其身を暴すことれなく而して造化の締べる此の大なる約束(婚姻と産)を仕遂る婦人は強壯を增し享生の日を長うすることを以て報賞をべし造物主の妙巧に命令をる所あり○常則を外れて妊娠中に起る或る不順あり偖この事は遲時く余之を話述んとを然るに余は復て爰に概へて妊娠の情態は非常に健康ある情態ありを放言つあり尙之れより一層大いあることは數多の例に於て妊娠は豫ての持病を改良をる感勢を顯しその病勢を抑止め或ひは斷然と治愈をることの成果を來をあり是を以て皮膚子宮卵巢及らびに腦髓と心經等の種々頑執き慢性病は妊娠中に治ること屢これあり而して妊娠中又は分娩後に明斷さる治療とあせば困難き子宮の變位も止めらるとあるは各醫の能く知る所なり○然りあがら妊娠の情態さるや衝動を起し而して諸種の記感と大いに受け易きものありと云ふと常に心に忌るべらを此の理に由て生活の慣行を變ることは無餘儀がもあるに妊娠中の攝生として余輿へさる教示を守ることは最緊要あるがもあるに之を守るに失をることあり○妻女さる人妊娠中に受け易き疾病は後に婚姻生涯の健康と題せる章に說論せんとを

産居

第六十章　分娩の預備

時としてい妻女さる人自分にい至極良きことと思ひあがら或る愚りあ
る預備と爲そとあり恐らくいこの愚りある用備の中にて最も普く用
られ而して最も誤あるもの3一つい陰部に樑覽油と施用ふることあり
即ちこれと用ふるい陰部の弛緩と容易くそるが爲あれ共決してその
功能あることあし去あがら爰に或る賢てき預備のことあらぜ爲ねべあら
ぬ用意ありこの用意さるや各の妻女が分娩に臨て不愉快と危險き葛
藤と防ぎ護るが爲に之れと詳知し之と施用ひぜんべあるべからぜ○
妊娠の終に向へべ特に乳房の狀と能く注意そべし年若き母親が産居
中に出逢ふ苦痛の中何あ苦痛も爛れさる乳頭の痛みより堪忍び難き
ものこれあると稀あり此の困難にして屢治ると甚ざ難き病い殆んど
常に産居前の不注意に原けり妊娠の終際に時としてい乳房の膨脹に
從ひて乳頭が縮込み又さ平低あることあり是れ即ち乳汁管に彈力の缺

乏あるがもあり偖この失ちと療治爲んとして從來吸乳器(一名ポピ
|)と施用ふることと知れり然るに如此の療治い危險きものとそ如何と
あれべ之れが爲に子宮の未熟收縮と衝起し而して流産と引き起そと
あれべあり之れと用ふることの代りに廣き綠と口と有る乳甲と求めぜ
んばあるべからぜ此の乳甲い無難もものにして而して之れと臨月或い
少しその以前より晝夜不絶に乳頭に着け置く時にい乳頭と突出さし
むるに奏功あり未だ嘗で一人も子女と産ざる妻女い右の通に乳頭の
沈み込みさる狀が之れあるか否ざるやと分娩前に見極め而して若し
これあれべ今示しさる仕方と以てそれと改正そる爲めに特別て注意
めぜんべあるべからぜ○偖又初妊娠に於てい乳頭と狂し固めると肝
要あり即ち之れと爲そと左の如し時々乳頭と摑と指との間に狹みて
柔かに摩擦り而して一日に二回宛沒藥丁幾か或い葡萄酒精と水とと

等分に混合するものに唯少し明礬を加へる水劑にて最終の六周日の間これを涵し洗ふべし斯それば乳頭の表面を兒子の口を以て軋擦るにその感じを稀らぎ依て初産に於て如何にも屢乳頭の痛みより起る所の苦難を免かるべし○若夫れ乳頭が草苺、水苺の如き狀を以て粗らかあるか又は結節を有つときには滑かある表面を狀そときよりは一層割裂るとこれあり易し如此ある形狀のこれある時には左の法を施そべし口徑の廣き壜の中に硫酸亞鉛の一ゲレーン(我一厘七毛餘)を醋薇花水の一チンス(我八匁三分三厘八毛餘)に溶和て一日に數回二三分時の間壜の口を乳頭の上に傾け宛て置くべし乳頭の痛みが唯瑣少にして僅かある割裂あるときは蓬砂の洗藥(水三チンスに蓬砂二スクループル(我三分四厘七毛餘)を溶解し而して虞里私林一チンスを和するもの)か或ひは蓬砂蜜か或は阿仙藥幾丁かを以て乳頭を涵し而して

腰絞具の壓窄及らびに布羅涅留の胴衣の摩擦を防ぐことに因て治愈るべし○分娩以前に乳頭の諸病を預じめ防ぎ又は治療そとは母親の快寛の爲に最も大切あることを如何とあれば産子に哺乳せる時に乳頭の痛を治療そとは屢不滿足にして且甚だ劇しき苦痛を起し時としては乳膿瘡を生ずることあり○産床に入用ある衣服調度の或る品具あり之れは要求の時にまにあふ樣に像め用備せんべあるべからず○産母は平常の寢衣の代りに膚衣の上に着るべき短き上衣を用備し置べし又一の適宜よき繃帶を備へ置くと肝要あり偖この繃帶は過粗らず過精らざる厚き綿紗を以て造るべし即ち生綿紗の通例良品を以て第一とす之れを大約長さ一ヤード四分一(我凡曲尺三尺七寸五分)幅拾二インチ乃至十八インチ(二インチは我凡八分三厘)にして角違ひに截つべし素より體の大少に從て丈幅共差異あれども約て云へば二イ

ンチ幅の緣と取りて分娩後に胴と環らし而して腰充滿に廣ぐるに丁度充分ある丈幅に爲そべしこの繃帶と造るにハ妊娠とあり四月半と經たる時に已れが體に試尺せて丁度その時適中そる樣に裁縫そべし繃帶の上端ハ狹くし下端ハ廣くし而して環着たる時に上方に滑り上らんとと防ぐ爲に下端ハ二三インチ程少し狹く爲そ樣に裁込むべし如此に造りさる繃帶ハ至極意地快くして且之と結びさる以上ハ轉位抔の憂あし若し之れの代りに手拭或ハ綿紗の眞直ある片と用ひたる時にハ必らず轉位の面倒と免れず偖之れと用ふるの法方ハ後章に詳らかに說き示そべし○產兒の衣類ハ先づ第一に環衣として布羅涅留或ハ何ク柔クあふ毛織の切れと用備そべしこの切れの幅ハ四インチ乃至六インチにして十二インチ乃至十六インチの長さに爲そべし詳らかに言へバ腋下クら腹の下部に擴ぐる程に充分の幅と有ち而して產兒の體と一環り半纏ふて腹の上でハ二重にある樣に充分の長みと有さしむべし偖この衣ハ縫飾あど之れある切れと用ふべからず又此の纏衣の上に着せる毛織の繻半と豫備そべしこの繻半は襟頸と至極高くして頸と能く底ひ陰そ樣に爲し而して袖と長くして手の底る樣に造るべし此繻半その他產兒の衣類ハ靴れも糊張と爲そべらず偖右の繻半の上に長衣と着そべしこの長衣ハ背後と襟頸より裾に迄るまで開くやうに爲して鈕止に爲べし長衣ハ長きものと短きものとの二枚と用ふるも良しその次の支度ハ產兒の着る通常の羽織ありこの上に前掛と着け嬰兒が切々胃中より吐出そ物にて衣類と穢そと防ぐべしその次に布羅涅留何ハ何にても温クある物の肩衣と用意して天氣の寒冷ある時に肩に掛べし右の外に長足袋及らびに襁褓に用ふる爲に緊張ざる古き軟クある布切と用備それば產兒の支度ハ調へ

りとそ○産床の支度い分娩の時とその後に用ふるために大約一ヤード四角縦横兩に凡三尺)の水氣の徹通らざる織物の切れ(油と抹きさる絹と最も滑潔ありとそ、通常皐子の上に敷油と抹きさる織物乎又いゴム織と一枚古き敷木綿及らびに褥團の數々而して厚き床敷の一切れと豫備置べし偖此等の品具と用ふるの方法い直に説明そるべし○小さき端の曲りさる鋏み一丁産母の綳帶と止むるに用ふる長さ一ヤード半の太き止針と産兒の綳帶に用ふる少し小き止針一包、醫者ゞ赤子の臍の緒と結ぶに用ふる良質布の紐、産兒と洗ふに用ふる良き粧粧石鹸と組織織き外療海綿、刺劇と止むる散藥一箱、而して手巾の一群は孰も分娩の時より數周日以前に求めて備へ置かぞんべあるべからぞ此の諸具い臥臺の支度、産子の衣類、母親の綳帶と一所にして之れゞ爲に設けられさる籠の中に入れ置かぞんべあらぞ然そる時にいもし然せしして分娩の騒動にて恐らくい此の諸道具と忽ちに集拾ると困難しき時に臨んで一々容易く確實に見出し得べし

第六十一章　分娩の近よる徴候

産居の來る前兆の最も早きものゝ一つい分娩以前大約二周日頃に現る是即ち子宮の落沈あり此時に至れゞ大概子宮の頂ゞ臍の上より臍の下に降り而して腹の太さと減ぞ胃腑と肺臓とい壓窄と免れ婦人い一層自由に呼吸と爲し今迄彼れと難ましめさる窮屈ある感じい消失て彼れ自から甚ぞ寛快と覺ゆと言ふに至る此の身輕き浮々しさる感覺い追次に增加りて勞力と始むる前の二三日い彼れ運動の量と增んと思惟ふゞ程に甚ぞ快く覺ゆるものとそ素よりこれまで數人の子次と産みさる母いこの徴候と詳知せると雖も初産の妻女い家内又い戸外に於て不當に勞働過して街中或い自分の家と離れたる時に勞力

と引起ることあり是れに由て此の前徴と詳知ることを最も大切なり○分娩の第二期の徴症は陰門外部の膨脹と増加ることと黏液の涌出と加多ることあり偖この黏液の涌出は白帯下と等しきが程に多量に注下りて褌と帶ぶる程に至ることあり然しこの症狀は善兆にて即ち局部の弛緩ある質と示して安産の約束ありとす○余か顯さんとする第三期の前表は妊娠女の心狀の變化あり彼れ心痛不安心の感じと起し時として氣力の沈鬱と伴ひ來ることあり此の内感の離めるる狀態は特別なる例に於ては思惟克已、あらゆに宗教の爲に左右せらるることありて數日間續くことあり恐らくは左の問題の出現と爲ることに迫るまで續くべし

第六十二章　現實の勞力の症狀

此の容體の第一のものは一般て覺狀なり是れ即ち今迄子宮の頸と充塞し黏液栓の注下にて而して通例少しく血と帶て下れり恐らくはこれより以前に痛みと始めてこれより以後暫時の間は痛みと忘るべし偖此の痛みは斷間ありて最初には一時間或は半時間の狹間と置て起り而してその特質さるや錐と捻込むが如し眞正の分娩の痛みは背より股に移りもく樣に覺えらるると以て僞陣の痛みより區別らる僞陣の痛みは背股にあらずして腹の部にあり眞正の痛みは狹間と置きて發し僞陣ものは多少維持り而して眞正の痛とは追次にその狹間と短くしその劇しさと增加ふ然るに萬一眞僞の確ある質に於て疑いしき例に逢ふ時は醫者と招りてんやあらず然れば即ち醫者は勞力が始りさるや否やと明瞭に決定し能ふるあるべし偖又分娩の現に始まりさることと指示す他の容體は大小便と頻りに爲んと欲することと嘔吐の氣味又は現に吐出ることと(此吐出は産居の初期に起るは善兆なり)寒氣あしに

戰慄そると、而して最後に水胞が破裂けてその中の物の注下るとあり

○妻女さる人が將に今入込さる產居の取捌に關る思考に押移らんと

そる以前に勞力の原因に付て二三言と發つゝ不當にあらざるべし

第六十三章　勞力の原因

期滿て分娩と爲そにゝ產兒の大小或ゝ强弱に少しも關係あるとあし

夫れ子女ゝ己れが裂出と起そとに於て主働者ありと云へる往古の理論（著名き博物學者ブーフォン氏ての說と贊成せり）ゝ今日とありてゝ看破れさる理論あり或人ゝ胎兒が飢餓と覺もる樣にありさると以て自分子宮より離れ出んと爭勉き始むるありと執言り又或人ゝ胎兒が一回呼吸と覺えさると以て呼吸と爲んがさめに此世に出來ると成功せんとして分娩と起そありと意へり然あがら總て此諸怜悧ある理論ゝ大人が斯樣に塞圍さる居所に閉籠られたる時に感せんとする同

じ感覺と胎兒が現に有つべきありと牽强られたるものにして滿足ある說にあらざると以てこれゝ許諾され難し兒子ゝ分娩の推步と少しも妨ぐるあくして子宮內に死そるとあるゝ吾人能く知る所あり然れば即ち此の事實耳にても胎兒ゝ分娩と誘ひ起し或ゝこれと排收しむるとに於てゝ全く受方ものあり而して如何考へても左樣あるべしと思ゝる夫れ勞力の主とそる原因ゝ子宮而已に根せり此機關（子宮）の收縮が爲に腹と橫隔膜の筋肉の助と假りて痛みと起し而して兒子と押し出そものとそ去りあがら腹と橫隔膜の力と假るとゝ必ずしも要用あらざるゝ產母が死しさる後にて兒子の產れ出るとあると以て明瞭に證據さてらるあり如何とあれば母親が死で三日の後に勞力が始まりて双子の產れ出さる例と記錄に載らるればあり

第六十四章　勞力中の注意

余今假りに分娩が始まりさると見做そべし此時に至れば産母の臥臺の用意に取り掛らぞんべあらぞ褚産母ゝ臥臺の左測に臥そべきが也。

ゑにこの場に臨んで支度そべきゝ左側にして決して他の側と注及ふに及ばそ之れと爲そにゝ臥臺の上具敷木綿薄團或ゝブランケット、表衾と一枚々々剝ぎ欲ふときに容易く引き被せらるゝ様に奇麗に臥臺の右側の上に疊重ね置くべし永久の支度(分娩後も取除うぞおく具)ゝ下、敷木綿(臥臺疊の上に敷きさる木綿と臥臺疊との間に置くべし余が前條に産居の豫備に付て説きさる節に求め置そんべあらぞと教示さる軟らかる水氣の徹らざる織物切と臥臺疊の直次に置くべし注下物が臥臺と穢そと確に防ぐ爲めに其上端ゝ殆んど下枕(枕の下に敷く細長き振)の縁に至らしめ而して下の端の腰の水準より少かくも一尺の距離に至らぞんべあらぞ此上にブランケット乎敷木綿と敷て右の織物切

れと能く止針にて綴付くべし而してのち右の支度と爲そさめに一時右側に折曲げたる臥臺の下敷木綿と今ゝ元の如くに爲そべし該の永久の支度の在る上の所に下敷木綿の直上に奇麗に折半に爲しさる敷木綿と取り折りさる端と足の方にして敷平し而して之と變位ざる様に止針にて綴付くべし産母が分娩と爲しさる後に臥る下敷木綿ゝ即ち是れ第褚分娩ゝ右の支度の上に取調へたる一時の支度の上にてそべきかりこの一時の支度と云ふゝ油と抹きさる織物切にして永久の支度の下端と越えて廣がり右に云ふさる折半の敷木綿と上より庇ひ包み而して臥臺の左側と越えてその下側に垂れる様にそべし此の油織物の上に何にても柔らかにして水氣と吸取る物と置き而して此上と折半にしさる敷木綿にて庇へばこれにて一時の支度ゝ足れり如此支度とかせしらへゝ平常の寢具と調へて右の支度が入用にかるま

でいそれと寢具にて庇し置くべし臥臺下の幕に手操揚げて置き而して床の上にに床敷の切れと敷き置くべし臥臺に足板(臥臺の裾の方に在りて風除と飾の爲めあり)の無きものゝ又に之れあるも甚だ低くして產の時妨げにならざるものと用ふべし○產母の支度敷或に折りたる敷木綿のみと裾衣として歩行の妨げにならざる樣に腰の周圍に纏ふ或に又婦人の上繻半と袖と通さゞして腰より足の端に屈く樣に着かそべし左しさ所と膚繻半に引き摺り揚て高く胸の周圍に折り纏そべし而して背の方に一々能く折目と付て之れと前面に引き出して止針にて綴付くべしてれに充分能く爲さんがあるべらゞ否ざれば分娩の濟みさる後に之れと引下さる時に濡りて穢はしくてれあるべし未だ臥臺に就くとと要せざる以前勞力の初期の間にに環衣と着るも妨げかし然るに分娩の時が來るや速や產母に一時の支度の上に已

れが左側と下にして位地と占むべし彼れが上に敷木綿と一枚庇せ彼れが頭に彼れの體が能く前の方に屈るとが出來る樣かある所に置きさる枕に持せ而して兩足に臥臺の柱に踏張るべしこの時一枚の敷木綿と捻て繩のとくに爲し臥臺の脚に結付耐痛の頂上に於る間產母に握らしむべし而して醫者の入用として拭巾、豚脂、並らびに分娩豫備の章に於て數立さる所の鋏、紐、繃帶等と容れたる籠と手側に有つとに注意くべし○分娩の用備と取扱に關りて妻女さる人が知了せねばならぬ丈に余右に說き盡せりと雖も之れに醫者のその席に在る時のとかり如何とかれば分娩の時にに常に醫者の詰居ると肝要かるに明瞭かればかり去りかゞら或る場合に於てに醫者が餘儀かく居合さゞして勞力に全く彼れが來着以前に濟むとあり斯樣かる時に臨んで產局に必要かる務めと仕遂るの先導として余二三の示諭と看護人に與ふると

左の如し

第六十五章　看護人への示諭

産居中にその部屋を靜にすべし過數の人此内に入ることを許すべからず如何となれば多人數に空氣を惡しく爲し而して會話を爲して産母の心をおびて或に氣欝せしめ彼れが心を攪亂さしめ易きが故なり偖産兒の頭が産れ出るや否や臍の緒にて頸を纏ひにせぬうと直に見極めをんべあらず萬一頸を絞てあれば直に取り除くべし又に弛めるべすべし若此の注意の怠る時にそれこそ産兒の生命を損ふことあり如何んとなれば輓近に余自身に斯樣なることに出逢べなり之れに余が倒着する二三分時以前に出産して見れば其の頸の周圍に臍靭帶を繞へり偖又直に面に大氣の入る樣にすると呼吸をすると妨ぐるとあるが故に口中に指を差し入れて何にても碍りを爲す物を取除くを而して母の下り物より頭を除て左側を下にして臥さしむべし臍の緒に赤子の啼聲を聽くまでに締ぶべうらず偖その締方に左の如くなすべし紐の切れを臍靭帶の周圍に廻し臍より指三本幅の距離に重結に締ぶべし第二の紐切れを以て最初の所より一インチ（我凡八分余距離を置て締び而してこの二箇の中間を鋏にて斷つべし此時に無心經なる赤子の指を鋏みたり又に彼れを傷けざる樣に注意すべし如何となれば不注意よりして一度あらず斯る失錯を引起せしことあれば産兒が母親の體を離れふる時にこれを受取る爲に温なる毛氈或に布羅涅留の切れを用意して置くべし小き新客（赤兒）を取揚ぐる時に手より逆り落て損害ふことあり無骨無得手なる人に甚だ能く此凶變を引起し易きものなり之れを防ぐ爲めに常に一方の手の拇と食指の狹間に赤子の後頸を挾み而して他方の手にて両股を攫むべしこの仕方にて赤

兒と無難に持運ぶことを得べし斯樣に毛氈の中に包みさる赤子を無難なる所に運ぶべし決して腕持せのある椅子の上抔に置くべからず否らざれば或る人がよの椅子の既に充ぐると知らずして壓潰せることあるが故なりまた赤兒の頭を覆ひ庇して呼吸を止むるとの危難に少しも逢せざる樣に注意せべし

第六十六章　産母への注意

胞衣が下りさる時にも産母を少距離（六インチ乃至八インチ）臥臺の頭の方に拽き上げて彼れが體の周圍に止針にて綴付さる木綿も臥臺の一時の支度と共に取除き淨らかなる敷木綿を折りて臀の下に敷しむべしさ所で陰部を湯を柔らかなる海綿又も木綿切れにて靜かに洗ふべしその上にて赤葡萄酒と水とを等分に和さるものを以て涵せば快くして且有益なり尚又熱湯にて數回も能く洗ひさる鵝鳥の脂と内外に塗れば甚だ痛みを和らげ而して諸の刺劇を速やに止むるに功能あり總てこれ等のことを爲すにも寒冒を防ぐが爲めに物を庇ひてそべし今此時に及べば以前に胸の周圍に針にて止め置さる繻半を元のごとくに綴むべし而して産母の綳帶を繞ふ用意を爲そべし偖この綳帶も膚に直付に爲そべし若しこれを適當く手奇麗に仕付さる時にも至極難有覺もるるべし右の綳帶の造り方も既に前條に與へされば茲に疊言せぬこれを用ふるにもその丈けの半分を折疊み而して産母として左側を下に臥せしめ綳帶の折疊みたる端を産母の左側の下に成丈奥に押込み而して折らざる端を腹の上に引延し然る上にて産母として背にてもきあり綳帶の上に轉び乘らしめ而して折りさる端を拽き出すべし萬一腹の筋肉が甚だ弛みて腰骨が突出れば洋手拭を二三箇共所に堅填むを要そるとあり綳帶も糸を決して用ふべからざる

がもゑに最初に中央の所と一本の止針にて横に綴付てそれより大約一インチ位距離と置て上下と止針にて綴付べし又上の方へ滑り上ると防ぐ爲めに繃帶の下部分ゝ確り固く爲そべし今此時におれば産母ゝ臥臺の永久の支度の上に引揚られて貰ふ樣に用意そべしこれと爲そにゝ母親ゝ少しも力と用ふるとおりしかるうへにて下物と受るさめに拭巾と一枚(決して折疊むとおりれ醫の下に滑やかに敷べし産母が左側と下に臥せるとと好むおらべ彼が背後に一の洋枕と置けよ

第六十七章　産兒への注意

今此時に至れば赤兒と洗ひ而して衣類と若くべし彼れと洗ひ始めるより以前に入用の品ゝ盡く手近に備へ置かそんばあるべうらと偖その道具と云ふゝ温水と一盥多量おる豚脂或いある他の脂肪石鹼絨維細き海綿及らびに繃衣縞半その他の衣類と容したる籠おり赤兒と洗ふに先第一にその體と豚脂にて充分に擦るべし赤子の垢と取除とゝ偏に右の仕方にあり石鹼耳り用ふれば皮までも軋り剝ぐ程に磨らざれば垢と取り除くに功おし産婆ゝ豚脂と掌滿に攫み取りてこれと手の掌にて擦込と格別に關節の屈筋に能く擦込まそんばあるべからそ一部分と塗る間ゝ他の部分と被ひて兒子の寒冒と防ぐべし右の仕方にて赤兒が全く潔いにおりとるおらば石鹼や水ゝ少しも用ふるとおうれ如何とおれば豚脂と以て磨潔めさる儘にして置く方が皮膚と一層健全の形狀にそればおり而して水氣の蒸發よりして赤子が寒に冒らるゝとの憂これおらざればおり去りおがら面部程ゝ石鹼と水にて洗ふべしこの時に赤子の眼に石鹼の入らざる樣に注意そべし稚兒の眼病の最も普き原因の一ゝこれに基けり右の洗方と終りさる時にゝ臍の緒と飾るべしこれと爲にゝ軟うおる綿紗と圓く斷り中心に孔と

穿け而して能く油を塗りさるものを以て包むべしその次に繃帶を纏ふべし偖この繃帶を用ふるの目的は赤子の腹部が寒氣に冒てられざる樣に護ると而して臍の緒の飾りと轉位ざる樣に保つが爲ありての繦衣(即ち繃帶)の質形及び丈幅は余前條に記せり之れを綴付るには前面にて止めぞんばあらぞ止針は大概三本にて充分あり然る後は前章に敷揭げさる衣服を着せしめよ○赤子は右の支度が濟や速に產親の乳房と哺めしむべし斯樣に母親の乳を哺しむるには三の理由あり第一には最屢起る所の溢の溢れ出るとを防ぐが爲あり若如此爲ざれば溢は甚ざ溢れ易し第二には之れに因て產後第三日目に起る乳汁の激發を防ぐが故に乳房に乳汁の滿過ぐるとなく依て體中の攪亂そると防ぎ乳の滿張よりして起るところの熱病を防ぐの助けとある第三には溢の出始めより乳房の中に必ず一種の泌分ありて赤兒がそれを哺むべきものあり如斯とかれば下藥の功用を爲し肝臟の衝動を起し而して產出たる時に赤兒の腹中を充る所の分泌を腹中より下し淨むれば偖又最初の二三日の間は大概母親の乳にて赤兒を養ふに充分ありとを母親は自分の好む通りに左あり右あり下にして横にあり而して己れが下に爲せる方の腕に赤兒を取るべし若乳頭が充分に仲出ぞして亦子の口にて含へると能きざる時には之の困難に勝つには葡萄酒壜に熱湯を詰めて之れを注空し而して後その壜の口を直に乳頭の上に蓋そべし斯爲るとに因て壜が冷えるに從ひ縮沈める乳頭と膨脹らしむるに充分ある吸引力を起そるべし然る後に壜を取除けその代りに赤兒に吸しむべし萬一兒子が乳を吸ふとを嫌ふあらば少しく砂糖水か又は砂糖を和しさる乳汁を塗るべし

第六十八章　分娩後母親への注意

産母い四五時間毎に淨潔に爲ぎんばあらぎこれとおそにい温かかる鹼石水に濡しさる柔かき拭巾と寢具の下より通して股中と風に暴さざる樣にそべし石鹼水にて拭ひ潔めさる後い復び以前のとく水と和して稀くしさる赤葡萄酒と鵝鳥の脂と用ふべし産後母親の身の無難い大いに淨潔と守ると否らざるにあり産母の襁褓い下り物と以て滿濡るまで久しく置くとあり○母親い最初纔らの日數い臥居ると嚴重に守り何事にも己れが肩と洋枕より揚るとおかれ而して訪に來る人に逢ふべからぎ且又最初の二十四時間い少しも世上の談話にさつさいるとあり○乳が出始めて乳熱(乳が滿張して爲に起の熱病)の時と經過ぎ迄最初の三四日の間い産母の食物い輕からしむべし即ち撫麥の糝茶の炙餅蒸餅と水より煑て牛乳抔にて甘味と付さるもの、その他何物にても積の少おくして衝動と爲さいる質のものと與ふべし

又三四日と經れば雞肉、幼羊肉羊肉、或い蠣と煑湯しさるもの牛胳と塗りて炙きさる蒸餅及らびに玉子抔と加へて食物の分量と增そべし斯樣に最初の中にい滋養と輕く爲その目的い乳汁の餘り急やかに泌分と防ぐが爲めあり否らざれば局部の害と及らびに體質の障碍と提起ぎとこれあれば有り去りあがら萬一産母が弱體あれば最初より小量にして滋養ある食物と以て養成さぎんべあるべからぎ斯る時にい牛肉茶い甚ざ奏功あり特に左の敎示通りに製へさるならば最も良し(牛の腰耶頸らの鮮かある肉と一磅(我凡百二十目)取り充分注意けてその中の脂肪と去ぎその上にて肉と細く切刻み而して唯僅かの食鹽と粹粉にせざる黑胡椒と五粒程加へ然る後に之れに冷水と一パイント(我三餘合)注ぎ而して四十分時間漸々に煎じ出し左しさ所で汁と注去り肉と織物の切れに置きてこの肉が含める液と茶の中に絞り出しその

糟ハ廢て右の茶と再び火に懸けて十分間沸騰せべし○最初の一周日と過せバ産婦の食物ハ淡薄なれ共常に滋養ある品と用ひぜんべあらぜ乳腺の開發乳汁の製造及らびに子宮の小くなるとハ適當にそれが功用と成そにハ孰れも滋養と増加ふると要そ○分娩後第三四日と過れバ産婦の衣服と取易へぜんバあるべからぜ余が教示通りに爲せしならば勞力中着さる衣服ハ穢れざるべし衣類と易へるにハ體と肌ハ之に爲そとなかれ而して頭も洋枕より上せるとなかれ寢衣ハ両腕と各拽脱ぎて體の下より引出そべし然る後に繻絆の前面と施し之れハ頭と越して脱放そとなり難きが故に裾の方から脱除ぐ樣に産婦の足の方に引下げよ斯樣に以前の衣服と脱さる上ハ彼れが腕と淨潔なる繻絆の袖に通しそれから繻絆の胴と彼れが頭の上と越して臥臺より彼れが肩と持揚ぐるとなしに之れと拽下そべし其上にて臥衣と同樣の仕方にて着易へさそべし○臥臺の上敷木綿と易へるにハ他の寢具の下側に沿ふて裾の方より引取り而してその代りに淨潔なる敷木綿と頭の方より引下げよ之れハ敷木綿の裾の方の半分と折疊むとに因て輙く成功らるゝなり偖又淨潔なる下敷木綿と取易へるにハその一方の側と折疊て産婦が左側と下にして臥て居る下に押遣るべし而しさ所で彼れとして背にて寢轉と爲しむれバ折疊みさるものと引伸そと容易に爲し得べし此等教示ハ一寸譯のなき樣に考へらるゝとハ雖も大切なるとなり元來之が目的とする所ハ産母が最初の一周間ハ纔ら二三分時なりとも床の中に起坐れべその爲めに大危難に逢ふとあると以てそれと防護るが爲なり○下藥ハ分娩後第二三日の間ハ猶更のと又その後といへども止むとと得ざるにあらざれバ服用そなとなれ産婦が充分氣持能くして腹中に少しも痛みと有ぜ頭通もなく

して萬事健りあれば假令大便の通じこれあるとも其儘に捨置くべし萬一通じ藥と要そるとあらば枸櫞酸、苦土と服用そべしての緩下藥の力が斯る場合に左しも屢用ひ來りさる唐胡麻油よりも大いに服よくしてその奏功に於ても少しも異あるとなし

第六十九章　苦通と見るとなしに分娩と爲その法

勞力の劇痛と避け而して苦しむとなしに子女と設くると能るや否ざる乎抑此の問題さるや術學の贊成して答ふる所の的あり醫術も即ち婦人が試驗(產)の時に臨んでその病床にリーシー(荒唐說に所謂地獄の川の名にしてその水と呑とき一何事も全く忘却そこの水と持來そなり近年にいさり迷蒙水及らびに依曹兒の兩藥も外科の治療にこれと用ひて奏功せると同樣の功能の以て分娩の苦痛と減消そる爲に用ひられり此藥劑の施用も難產にて或る外科療治と用ひねば叶はぬ時に

あらざれば決して本心と失なわしむるまでに强く用ひそして唯感覺と鈍くして苦痛の耐へらるゝが程の加減に用ふべし此使藥も斯樣に用ひらるれば產兒と害そるともなく亦勞力と遲延しめさり或も少しも母親の身と危難に暴らそともなしこれと適當に用ひさるときにも睡眠と催して氣力と爽かに爲し疲れ弱りさる心經に働きと付け而して分娩と速かならしむものとそ○右の藥も必そ醫者の在居ざる時にも用ふべからぎ如何とあれば醫者ばかりこの藥劑と仕損なき樣に用ふると得れべなり勞力が自然にして容易く短かくして苦痛と輙く忍べるゝときにも右の藥劑も不用なり然るに苦痛劇しくして分娩の遲延なる場合就中外科器械と用ひねば叶はぬ時にも依曹兒と迷蒙水の二藥も價直そべらざるの功能あり

第七十章　產床の死亡

妊娠の度數ゝ産居の危難と左右するものとそ最初の勞力の死亡とその分娩後の産床熱よりして死ぬるとい總様その後の諸産に比較れば殆んど倍せり偖又第九回目の勞力より後に至れば死亡の數ゝ勞力の數につれて增そものとそ故に數多の眷族と持つ婦人、第九回目以上の子女と産むがもゑに一層大いなる危難に罹り易し○婦人の年齢ゝ亦産居の死亡に關係とあせり産の爲に死ぬるとの最も稀なる齢ゝ二十五歳前後なり此齢より上下に增減そるに伴れて死亡も增減せり夫故に産居の最安全なる年齢ゝ最懷み易き年齢に當れり而して婦人孕胎の全期限中勞力の安全なるゝ孕胎易き時と安全なりとそ而して孕胎と難き時ゝ等しく産も難しきものとそ是れに由て方今の統計ゝアリストートル氏が發せし左の言の正確なると證據立り未熟の婚姻ゝ女性の身の上に特別て危險なり如何とかれば造化の要求に先立ゝもゑに斯る婚姻とあせる婦人の數多ゝ大いに分娩の苦痛と見まと死そるとあり」と然れゞ即ち二十歳乃至二十五歳の時限ゝ産の難み最も少きものなるがもゑと而して第九回目以後の勞力より以前の諸産の中にてゝ最初の分娩こそ一層危きがもゑに死亡最僅なり是れこの時期と撰んで人母さる義務の域に入ると緊切なりこの一條ゝ余既に婚姻の年齢に付て說論そるとに於て指示しぬ○兒子の性(男女)ゝ勞力の死亡に關係と爲そ他の狀態なりエッヂンボルグの大學敎師シンプソン氏ゝ死亡の數多ゝ男子と産める婦人にあまと云ふとと顯せり○又勞力の長短ゝ産居の死亡にさしひいきとあせり偖危命ゝ産そる時間の長さに從て增そあまと去りながら勞力の長短ゝ分娩の爲に死亡の數因にゝ唯僅りなる關係ありと云ふとと記憶せそんばあるべからそ

第七十一章　産兒の重量及びその身長

男女の兩兒共產れ出さる時に平均の重量ゝ大約七磅、我凡そ八百四十目)ありとそその中男兒の平均ゝ七磅と三分の一(我凡そ八百八十目)女兒の平均ゝ六磅と三分の二(我凡そ八百目)あり滿期にして產れさる兒ゞ五磅(我凡そ六百目)以下の重さある時ゝ成長そると難くして通例久しからずして死亡るものとす○性(男女)の區別あく難落さるとき平均の丈長ゝ凡そ二十インチ(我凡そ曲一尺六寸六分)しかし男兒の方ゞ女兒よりゝ凡そ半インチ(我凡そ曲四分二厘)程り長し○產兒の大小と母親の年齡との關係に付て左の面白き結局と得られさり滿期て產れさる子女の平均の重さと長とと考ふるに母親の年齡ゞ二十五歲に滿るまでゝ段々に增加そ依て母親の年齡二十五歲乃至二十九歲の間に產れさる子女ゝ最も大いあり三十歲以後に產れる子女ゝその太さ漸次に減少そ而して初產の子女ゝ他の子女に比ぶれべその重輕少あり偖

又鳥類ゝ最初の卵子ゝそれに次て產れる卵子より小さし○米國西部の諸州に於てゝ產兒の大さゝ統計表に顯はせる歐羅巴諸國の產兒の大さより大いあるゞ如し加之あらぞ米國東部の諸州の產兒よりも明らかに大いあるゞとし千八百六十八年のイリノーイ州の公立醫學社の產科報告中に左の事情と顯せり[同州クインセーに於て同年中に男兒六人產れしに產出たる時の平均の目方ゝ十三磅と四分の一(一磅ゝ我凡そ百二十目)にして此中最も大いある兒ゝ十七磅半あり偖この最大ある兒ゝ器械其他の助けと假らぞして勞力ゞ始りさるより四時間にして產出さり此他の西部の或る醫學雜誌の輓近の番號に去る二月中にデトローイに於て目方十六磅長さ十四インチ半の體格好き兒子の出產と報告せりこの兒と產そたる後婦人の目方ゝ僅かに九十二磅ありと云へり玆又英國の或る醫者ゝ鑄子(難產の節に胎兒と攫み出そ

器械の助けを以て目方十七磅十二チンス(我凡そ二貫八十目)長二十四インチある兒を分娩せしめり有の諸例ハ從來記錄中に有る最大なる産兒の確實なるものなり

第七十二章　勞力の時間

自然の分娩の長さハ二時間乃至十八時間の差異あるなりと爲られり去りながら苦痛の間歇る時間の長きがもなに最長き勞分でさへも現に苦しき難む時間ハ比較に甚だ短きものとも就中初最の産ハその後の産に比らぶれば大いに長し○子女の性ハ勞娩の長短に少しく感勢を有てりダブリンの産科病院の醫學博士コーリス氏の說に因れば男兒の分娩ハ女兒の分娩に比ぶれば一時一分長しと偖又兒子の重さも勞力の時間と增減とを然れば即ち八磅以上の重さを有つ子女ハ八磅以下の子女より分娩そると平均四時八分間長し

第七十三章　死兒産

倫敦の官立産科貧院に於て殆んど五萬の分娩の統計表を見るに殆ど百分の五ハ死兒産なり即ち二十七産毎に一の死兒産の比例なり○死産ハ女兒よりハ男兒の方に多し余既に男兒の分娩ハ女兒の分娩よりも暇取り而して男子ハ産れて初めて二三年の中に女子より死ること多しと云ふ事實を說きさりし此の不幸の一連さるや生來男胎兒ハ女胎兒よりその軀體の大いなるがもなるがなりとせり

第七十四章　産後の不攝生

滿期或ハ不滿期にても子女を分娩しさる上ハ妊娠の爲に僅小なる月數に於て斯る不思儀なる比例に達しさる子宮がその以前の太さに復ることを始むるものなり偖この推步ハ全く以前の通りに復るにハ少なくとも勞力後六周間を要そこの時限中ハ休息を旨とを過早く生業の

務めと平常の如き働きに復るときゝ原の太さに子宮の復ると遲延しめ或ゝ箝止め而して此際ゝ子宮に重みと有つがもゝに右の如き勞働ゝ婦人と子宮變位の大危難に暴そ尙又勞働に餘り早く復りたるよりして生ぜる危難ゝこれのみならぜ子宮の表面組織及らびに裏面の粘膜ゝ子宮が以前の太さに變り來るときに際て僅ゝ風に暴せゞ忽ち嫩衝と起し安し抑子宮の嫩衝及び膿腫の最も惡症ゝ斯樣なる不始末より起れりまさ寢起に氣分惡しきと、羸弱の長延と苦痛及らびに餘計なる下物ゝ分娩後の不攝生に付屬ふ懲罰中の最輕きものとそ下等社會の强働きと爲そ婦人等ゝ產後纔日にして日常の務めに復るも懲罰なしと想像なそゝ是れ誤りなり然れゞ即ち子宮の脫下及びその他の傾轉に付て最も苦しみ難む婦人ゝ如何なる者ぞと問ふに貧窶の故に分娩後第九日目にゝ止むと得ぜ床と離れ重き子宮と抱へて一日に數

時の間起立さり歩行さりして體と直立に爲して居る所の婦人あり貧人と多く取扱ふさる各醫ゝ子宮病に至極屢出逢ふと評して曰く子宮病ゝ貧人社會に如何にも普通產後の休息と怠さるもゝなりと若夫れ强働の生活に慣れさる强壯の婦人に於ても確りに斯樣なるとこれあらゞ鄭重に育成られさる婦人ゝ右の原因よりして苦しむと幾程か多りるべし如何とあれゞ鄭重に育てられさる婦人の體ゝ從來恐らくゝ既に損ひ害りて少しなる有害の感勢にも耐へ難けれゞなり○產母ゝ分娩後少なくも二周日ゝ臥臺の中に居らぜんゞあらぜ而して一个月以內にゝ決して我家務めに復るべうらぜ且又僂麻質斯に罹らざる樣に自身と寒氣に暴さぬとに甚ざ注意せぜんゞあるべうらぜ此時にゝ特に僂麻質斯に罹り易ければなり若し余が此の敎示と一般に守るならば婦女子固有の病と職とそる醫者と要そると少なくして吾人

の家内に羸弱者も一層僅少かるべし

第七十五章　分娩後體の形ちを守る事

此の事さるや數多の婦人が大いに心痛そる條件あり而して弛緩て垂下りさる腹ハ動作の恰好と外面の均合と崩頽そのみならぜ且へ其身にとり必らぜ不便あるが故に右の心痛と起そも當然あるとあり○之れと避けんとせべ過早く産床と離れざる樣に宜しく注意せぜんべあらぜ産後腹壁が甚ぐ弛緩てあるあらば二周乃至三日の間ハ臥臺と離るべうらぜ毎日酒精と水と和合せさるものと以て柔らうに摩擦べ腹の筋肉と強くあそあり去りあがら腹の形ちと平素に復そとの最も緊要ある點ハ數月間能く密接ける細帶と繞ふにあり偖この細帶ハ手拭と體に繞ふて針にて止め置くやうあるとと爲ぜして隅角に裁ちさる強き布と以て腹の形ちに密着それども不快寛ある壓窄と爲さゝる樣に造りさる胴卷と用ふべし此の細帶の離形ハ余既に前章に説示しぬ

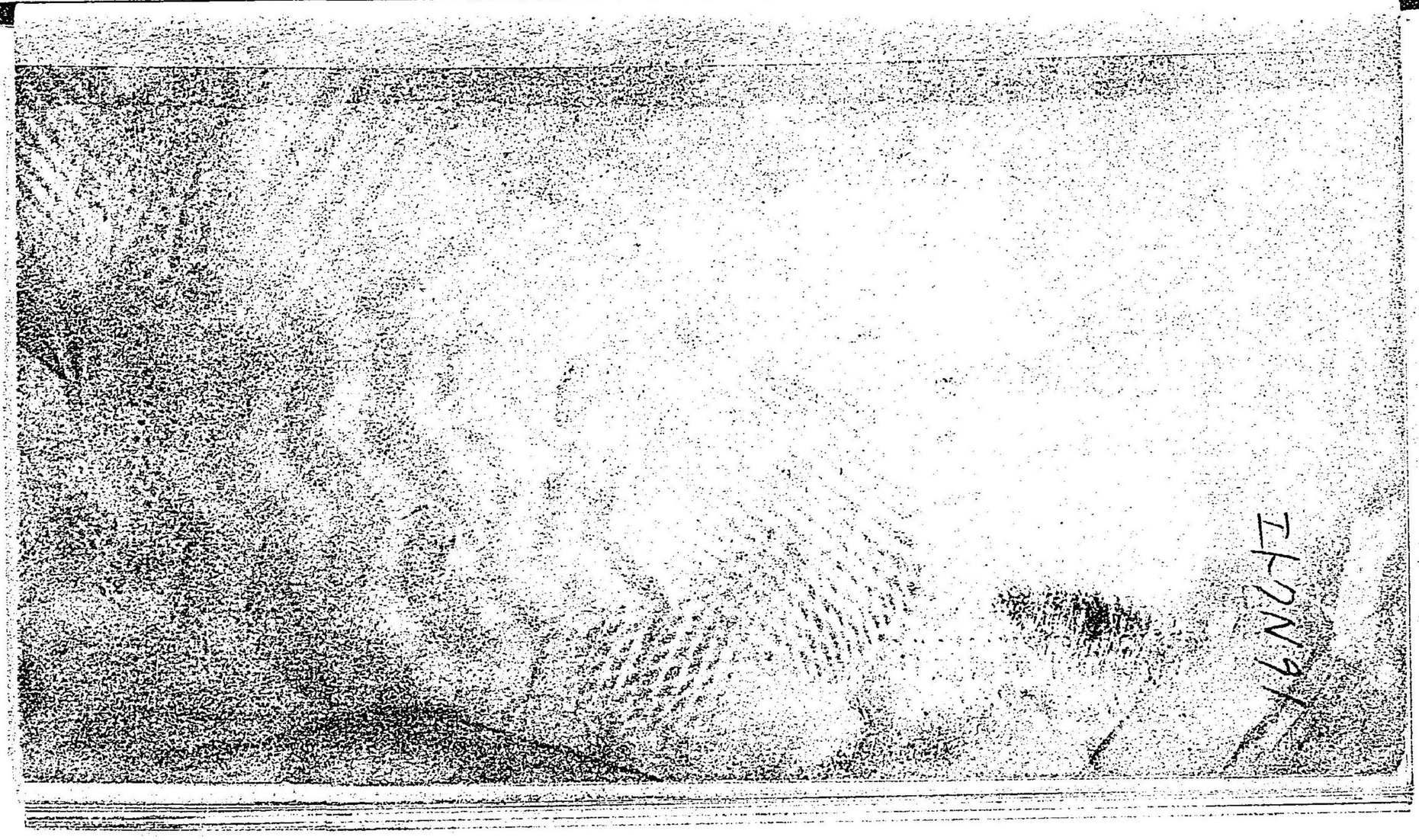
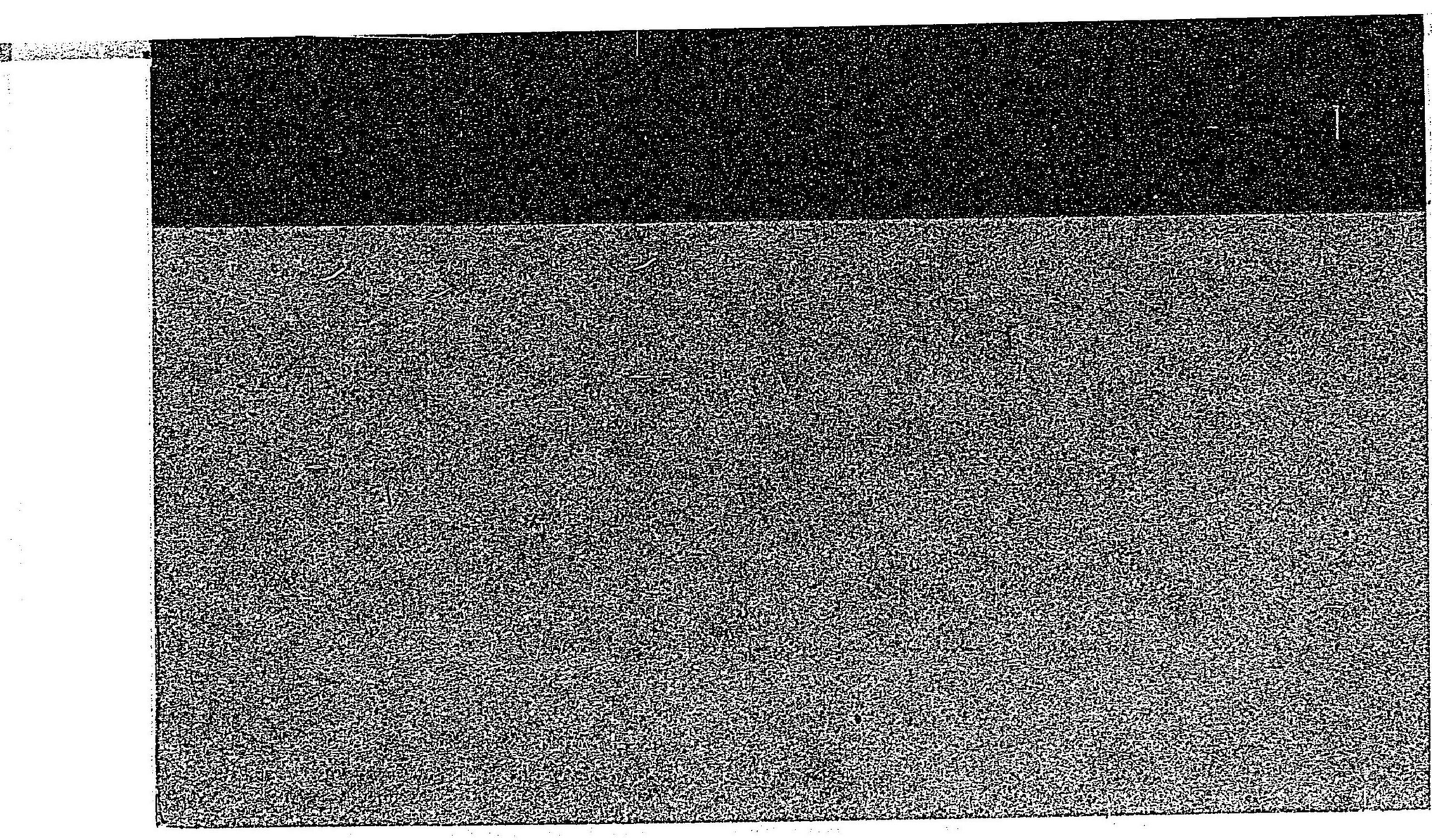


FIGURE 1



特69
290

204353-000-1

特69-290

婦女性理一代鑑

第2編

ナフェース/著

[出版事項不明]

EDR-0060